

メーデー
スローガン



2022年
5月1日
三角公園8時30分
デモ出発9時30分



通天閣
10時5分

第53回
釜ヶ崎
民衆メーデー
実行委員会

人類破滅につながる戦争。ただちにやめろ!

ロシアの武力行使反対!世界の民衆団結して核戦争防ごう
これ以上の人殺しは即座にやめろ!

押し寄せる経済不況・円安物価高
インフレ高騰と生活苦・上がらぬ賃金
生活防衛の闘いを!

不正・腐敗・汚職の政治体制の刷新! 迫る参院選は野党の奮闘を!

コロナ対策無為無策! 働く者を守るまともな経済対策を!

「最低賃金は全国一律時給1500円」「とくそう一日300人」

「福祉を充実させるベーシックインカムを実現しろ」

定額給付金10万円を再度支給しろ!「生活保護費の引き上げ」

家賃補助。雇用継続助成・無料宿泊制度の改善。

「野宿者の排除」を推進する「西成特区構想」には反対する。

大きく変貌する釜ヶ崎・多様な人間の生き方を支えあう民衆の団結を!

「貧困ビジネス」の餌食にされる釜ヶ崎

日雇労働市場の再生を! 野宿者を切り捨てる「新しい街づくり」であってはならない。

不安定労働者の雇用制度立て直しの具体的プランをしめせ!

旧あいりんセンターが備えてた福利厚生は必要だ。

労働者の団結・労働組合の権利を踏みにじるな!

5/1メーデー特別号

5/2 大阪城14257号

「入管法改正」はゆるされない

○広がる地区内のコロナ感染・医療の切り捨てするな!

Social Distancing

プロレタリアの休業日を定めて、8時間労働制を獲得するための手段としてその日を使ってゆこう、という妙案がはじめて生まれたのは、オーストラリアであった。その地の労働者たちは、1856年にすでに、ある1日をえらんで完全に仕事を休み、8時間労働制を要求する意志を表明する集会や行事をおこなおうと、決議していた。4月21日がその日とされた。はじめは、1856年のその日に1度だけ実施することしか、考えられていなかった。だが、この最初の休業日がオーストラリアのプロレタリア大衆に強い感銘をあたえ、かれらを大いに鼓舞する効果をあげたので、この種の休業日を毎年くりかえすことが、さらに決定されるにいたった。

じつさい、自発的に大衆的に労働を抛棄(ほうき)すること以上に労働者大衆に勇気をあたえ、自己の力量への信頼をあたえるものはあるまい。工場や事業場の永遠の奴隷たちを元気づけるには、かれら自身の勢力を眼のあたりに見せるにしくものはなかるう。だからプロレタリアの日という着想は、たちまちオーストラリア以外の国にも拡がり、いたるところで採用されて、ついにはプロレタリアが存在する世界の全体を征服することになる。オーストラリアの労働者の範例にまず続いたのは、アメリカの労働者たちだった。1886年に、かれらは5月1日を全面的な労働休止の日と定めた。

この文は1894年にローザ・ルクセンブルグによって書かれた「メーデーはどうして生まれたのか?」の一部分だ。わたしたちは、ここに、166年前から現在まで、世界中のあらゆる場所でメーデーが祝われるようになった理由を見つけ出すことができる。わたしたちは今日、それにつけくわえて、新たなメーデーの意義を見出そうとしている。

2022年2月、コロナの二エースを一扫し、ロシア軍の戦車が隊列をなしている映像がメディアを征服した。3月、若いロシア兵士が母にあてたメールの二エースが流れた。

「わたしはもうクリミア半島にはいません。わたしは訓練に参加しているわけではありません。わたしは今ウクライナにいます。ここでは本当の戦争が起きています。わたしはかれらがわたしたちを歓迎してくれると聞いたが、かれらはわたしたちの戦車の下で倒れている。かれらは自分を投げ出して、わたしたちが通り過ぎるのを防衛しています。かれらはわたしたちをフアシストと呼びます。お母さん、本当につらいです。わたしたちはすべての都市を爆破しています。さらに民間人の攻撃を目標にしています。」

この私的なメールには、国家や軍隊、ロシア兵やウクライナ兵という境界を越えて、戦場に赴く一兵士の心を描写し、敵対した兵士同士の間を喚起する力がある。あたえられた任務として、あたえられた労働として、人を大量に殺害する機械を渡され、兵士という名で働いている者たち。他人を殺めてしまうこと、自らも死ぬかもしれない恐怖、それらと引き換えに賃金を得て、衣食住を手に入れ、家族を養う者たち。かれらには戦争を行うための国家の防衛という大義すら疑わしく、ある者は演習という名目で戦場に送り込まれ、人間性を奪われていく。

若いロシアの兵士は「人間性」を奪われまいと死ぬ直前に母へとメールをした。「人間性の喪失」、これは兵士たちの問題だけではなく、わたしたちそのもの問題でもある。わたしたちの仕事もまた「人間性」を奪ってきている。

釜ヶ崎のある労働者は、何年も前、配送のドライバーとして働いていた。かれは、阪神大震災が起こった早朝、宝塚で配送をしているところだった。1軒目の弁当屋に荷物を届け店のシャッターを閉めた直後、地震がきた。店が背中でべしやんに潰れた。なんとか死なずに済んだ。しかしかれはその後、いつものようにルート配送を続けた。倒壊した家々の間の道路にいつものように車を走らせた。表に飛び出しさまよう人々、電話ボックスに並んだ長蛇の列、いつもと違う光景を横目に見ながら、2軒目へ向かった。3軒目の店が倒壊しているのを見て、初めてかれは仕事をしている場合ではないことに気づいた。同じ職場の部下に安否の電話をかけた。かれの心と頭と体を捉えた長年の仕事は、かれの人間性をいつとき奪った。もしかれがそうでなければ、近くにいるだれかの命を助けられたかもしれない。かれは現在、他の仕事がないときはアルミ缶拾いでしている。2年前の5月、緊急事態宣言のときは、1キロ600円まで下がった値段が、世界有数のアルミ生産国のロシアの供給不安の影響で、国際価格を底上げし、1キロ240円にまで高騰している。「このまま戦争つづいてまえ!」とかれはなげやりに言った。その横顔はアルミ缶で生計を立てざるを得ない自らの惨状をあざ笑っているようにみえた。このあざ笑いの中にもまた「人間性」を奪われまいとする抵抗が隠されている。

森友事件の犠牲者の官僚の赤木さんは、文章を改ざんさせられ命を絶った。自らの正義と公正を奪われ、心身を喪失した。かれの溢れる人間性は、それが最後まで奪われまいよう、残る力を振り絞った。本当の仕事として、人間性を回復する仕事として、命令された仕事ではない仕事として、なされたのは労働時間外で、自らの休息の時間を削って、財務省の決裁文書が改ざんされた経緯を克明に記録することだった。

メーデーのもっぴとつの意義は労働の休止そのものが、人間性の回復への一歩になるということだ。わたしたちは、今日、この釜ヶ崎で、労働者たちの闘争が無数に刻まれたわたしたちの遺産、あいりん総合センターの解体計画が進められる中、なくなった過去のすべての労働者たち、亡霊たちとともにデモをします。不当な賃金、過剰な労働時間、過剰な労働の強度を、セクハラ、パワハラを生む不当な上下関係を、そして人間の正義や公正からかけはなれた労働を、人間性が損なわれるすべての労働の廃棄を求める。世界中の労働者が自らの人間性を回復する。そんな日がいつかは来るだろうことを求めて、今年もここに集まった人たちとともにメーデーを祝いたい。メーデー、おめでとっぴ!